



建学の精神

頌栄女子学院はキリスト教主義の学校で、聖書の教えを徳育の基礎に置いています。

「頌栄」という校名は神の栄光をほめたたえるという意味で、学院の特色を表わしています。

頌栄女子学院は女子のための学院です。男女は同権ではあっても同質ではありません。したがって、男子と女子とではおのずから、受ける教育に違いがなければなりません。女子にふさわしい教養を身につけさせるためには、女子だけの教育が理想と考えています。

ここにいう教養とは、学力はもちろんのこと、高雅な品性や豊かな国際感覚の涵養、社会のために貢献奉仕できる人格の形成を指しています。そして、将来その教養が社会に出て活かされることを目標にしています。



頌栄女子学院 校章・マーク
聖書に多く見られる百合の花は、3枚の花びらで、神・イエスキリスト・精霊の三位一体を象徴。新制服採用時に校章となりました。

学校法人 頌栄女子学院

〒108-0071 東京都港区白金台2-26-5

TEL : 03-3441-2005 FAX : 03-3441-4043



創立

頌栄女子学院は、1884年(明治17)開校した頌栄小学校を始まりとしています。創立者の岡見清致は豊前(今の大分)中津藩士を父に持ち、江戸・築地で生まれました。父 清通の弟である彦三が大阪の緒方塾から福沢諭吉を呼び寄せた縁で、清致も福沢の説く実学の重要性に促され、英学を学びました。先進的な西洋文化を積極的に取り入れたのと同時に、幕末の儒学者 林鶴梁に学んだことを誇りとしていました。

清致の弟たちと同族の辰五郎は、第一長老派教会が芝につくった露月町教会でO・M・グリーンから洗礼を受け、清致も1年後に受洗しました。

グリーンはのちに〈頌栄英学校〉の教師となった戸田忠厚や安川亨らと千葉の大森、法典、佐倉などの伝道を行なったほか、聖書翻訳委員会の委員にもなっています。岡見家が白金猿町の邸内で開いた講義所(伝道所)が母体となって、品川教会から分かれる形で台町教会(現・高輪教会)ができた際には、仮牧師にグリーンが就任しています。

1878年(明治11)清致は、〈品台学舎〉をつくりました。届け出では、設立者は辰五郎でしたが、実際の創立は当時23歳の清致でした。辰五郎は築地の東京一致神学校で学び、台町教会設立時にはただ一人の初代長老に選ばれるなど、清致にとって信仰上も人生においても尊敬すべき先輩だったと思われます。品台学舎はやがて〈頌栄小学校〉として二本榎で1884年(明治17)再スタートします。発展的解消なのか、完全に別の学校なのか、今のところは不明です。

清致はまた、もう一つの学校〈頌栄英学校〉を翌1885年(明治18)2月につくっています。ヘボン夫人のクララの姪で新築女学校で教えていたリーナ・リートと、日本人で最初に牧師になった三人の内の一人である戸田忠厚を教師に迎えました。しかし、同年9月に〈頌栄女学校〉を開校して、女子の普通教育に一本化します。明治学院が男子生徒の募集を始めたことも、多少影響しているかもしれませんが、ミッションからの援助もなく、経営的に厳しい条件下で、女子教育に専念するという方針が進められたものと思われます。



創立者 岡見清致(1855~1935年)
旧土族の反骨精神を持って、日本のキリスト教女子教育に貢献しました。



創立の背景と歴史

清致は公の場所に出ることを嫌い、虚栄的なこと、営利的なことを排しましたが、さまざまなキリスト教活動を物心両面において支えました。頌栄女子学院は、海外伝道局や教会からの援助を受けずにつくられた〈クリスチャンスクール〉の典型といえますし、植村正久、湯浅治郎、小崎弘道といったプロテスタント系キリスト者のそうそうたるメンバーで始まった警醒社から『東京毎週新報』が発刊されるときにも、その出資者の一人に加わっています。また、1903年(明治36)東京基督教青年会(のちの東京YMCA)が、財政的な自立のために財団法人として設立する際には、本多庸一、安藤太郎、横井時雄らとともに発起人に名を連ねています。台町教会設立にも、多大な尽力を惜しみませんでした。

明治維新で武家屋敷は不要となって、府内の武家屋敷は官庁や軍隊のための設備に転用されました。しかし、府外(郡部)の場合は農地に戻ったものも多く、校地と定めた白金猿町の岡見家の所有地も、製茶(自家用)や養蚕に使っていた畑地を潰して学校を建てたといえます。

1888年(明治21)には、たつての願いで気鋭の伝道者木村熊二を頌栄女学校校長及び、台町教会牧師に迎えました。木村はアメリカで13年間学んで帰国し、植村正久の跡を継いで下谷教会の牧師になった人物です。また、1885年(明治18)九段下牛ヶ淵に近代女性教育の先駆けとして、明治女学校をつくりました。自由学園の創立者 羽仁もと子も、明治女学校の出身者です。

経済学者であり東京府会議員、衆議院議員を歴任した田口卯吉の姉で妻の鏡子が取締役を務めました。急な病で天に召されてしまいます。清致の強い要望もあって、明治女学校を辞し、頌栄女学校に赴任しました。清致と木村という二人のコンビは、頌栄女学校の評判を高めることに大いに貢献しました。

清致はまた、1897年(明治30)に〈頌栄幼稚園〉をつくり、幼・小・中の一貫教育を行ないました。頌栄幼稚園は32年で歴史を終えますが、初代園長の岡見京は、横浜共立女学校で福沢の娘と一緒にミス・ツルーに学び、桜井女学校で教鞭をとりました。清致の弟で画家である千吉郎と結婚し、千吉郎は新渡戸稲造と、京も後に渡米。滞在中にペンシルベニア女子医科大学で学んで、日本人女性最初の女子医科大学生となりました。ミス・ツルーが新宿・角筈につくった〈衛生園〉の設立に尽力し、園長を務めたほか、看護学校を併設して看護婦の養成にもあたりました。同時期に頌栄幼稚園の園長に就任し、幼児教育に貢献しました。

頌栄女学校の猿町新校舎での開校式には、オランダ改革派宣教師として来日したフルベッキ、横浜毎日新聞の主筆から政界入りした島田三郎、福沢諭吉らが出席しました。福沢は叔父の彦三が大阪から呼び寄せたことを恩義に思い、「岡見の学校だから来た」と挨拶しました。

福沢は、「始めた以上、家は潰れても学校だけは継続せよ」と熱心に勧告したといえます。家塾から始まった頌栄女学校は、1890年(明治23)の記録に全校生徒が合計25人とあるように、厳しい経営下に長くおかれましたが、福沢の勧告どおり、途絶えることなく歴史を刻んでいます。